Kio University Faculty Development

NEWS FD+

2017年
4月号

巻頭言

「知をみがく」多様な学びの促進

学長・教育推進室長　冬木　正彦

日本の大学はここ20年ほどの間、教育改革を求められてきましたが、近年その動きがさらに加速しています。学科・学部別に卒業判定・学位授与の方針（DP）、教育課程編成・実施の方針（CP）、入学者受入れの方針（AP）を策定し情報公開することの義務化や、三つのポリシーに基づく教育の諸活動の実施とその結果の自己点検・評価・改善を推進し、大学教育の内部質保証システムを確立することへの動きです。

畿央大学では教育改革が継続的に行われていて、「入学者受入れ」、「教育実施」、「学生の社会への送り出し」のフロー、学生が一人ひとりの夢を実現する道筋をつくる教育実践のフローが、素晴らしいレベルで実現できています。

このような状態を実現できていることは、個々の教員と学科などの組織の両者の努力・工夫が組み合わされ機能してきた活動の成果であり、教職員の皆様に敬意を表するとともに、さらにこの教育実践活動が継続し発展することを願っています。

個々の教員の教育現場での授業改善の工夫の一端はこのFD+に連載されている研究授業レポートからもうかがい知ることができます。先生方が工夫されていることの共通項は、授業のなかで学生とのインタラクションを通して、学生が自ら考えること、他の学生などと協働して自らの考えを深めることを、すなわち学生の主体的な学びの姿勢を引き出そうとされていることであると思います。このことはアクティブラーニングが目指す「学び」の本質であり、建学の精神の「知をみがく」という教育方針の具体化であると思います。

さて、このような授業改善の工夫・努力が多くの科目について実施されると別の課題が出てきます。予習・復習が必須である科目が曜日的に重なる状態が続くと、学生は自習時間確保が物理的に難しくなり、主体的な学びの機会を損なう恐れがあります。一方、教員の方も、学生の主体的な学びを促すためには学生一人ひとりをきめ細かく指導する必要があるため、授業支援システムCEAS等を使って作業時間短縮を図ったとしても、やはり教員の指導負担は増加するだろうということです。

このような課題を前向きに解決するには、学科レベルでの対応が必要と考えます。学生の事前・事後の学習時間を確保するには、各科目の授業の方法を時間割や学期内での15回の配置も考慮し各学期での科目全体を対象として検討することも必要であり、一方担任者が授業内容と方式の改善をさらに図るには、科目担任の割り振りでの考慮も必要です。

このように考えると、個々の教員の努力・工夫に基づいて教育の質の向上を図るには、現状での学生の「学び」（学修）と各教員の授業実施状況の可視化を図り、学科教員の共通理解の下で、科目の内容・教育方法を再検討し、科目間でメリハリをつける方向に進めることが望ましいのではないかと思います。科目の特性や授業の実施方法が多様であるので、可視化を図ることやメリハリをつけることは極めて困難なことであると予想されます。しかしながら、この方向へ進むことが、CPに基づきDPに掲げている教育目標の実現につながり、教育の内部質保証を行えることにつながるのではないかと思います。

これらのことが具体化できれば、個々の学生に対し4年間を通した学びの系統性を保証でき、将来への夢をもって入学してきた学生一人ひとりが夢への道筋をつけることが実現でき、有為な人材として社会に歩み出すことができると考えます。個々の教員の授業改善の工夫をベースに、DPを目標とし、CPに即して学科単位で組織的に教育を進め、畿央大学の全体としての「教育力」を高め、一人ひとりの学生の主体的な学びにフィードバックされていく、このような全体的かつ個別の教育活動がさらに促進されることを期待しています。

CONTENTS

巻頭言
特 集　2016年度FD研修会報告　いま畿央大学に入学してくる学生は、どのような学修履歴を経てきているのか ・・2
研究授業レポート
「人間発達学」　理学療法学科　森岡　周 ・・・

特 集

2016 年度 FD 研修会報告

『いま畿央大学に入学してくる学生は、どのような学修履歴を経てきているのか』

講　演　　関西中央高等学校　教頭　金沢　良一　先生

報告：教育推進室長補佐　石川　裕之

2017 年 2 月 23 日（木）に教育推進室主催の「2016 年度　FD 研修会」が開催されました。今年度の研修会のテーマは「いま畿央大学に入学してくる学生は、どのような学修履歴を経てきているのか」です。現在、本学では学生の主体的な学びを促すために様々な教育改善に取り組んでいます。いかにして日々の授業において学生の学ぶ意欲を引き出し、主体的・能動的に学習させるか。これについて考えていくためには、まず私たち教職員が教育の対象であり学びの主体でもある学生について十分に理解しておく必要があると思います。昨今の大学生、特に畿央生が高校までどのような学びの経験を積んできているのか、どういった考え方や志向性を持っているのか。これについて知る手がかりを与えていただくために、今年度の研修会では中・高・大および予備校において豊富な教育・指導のご経験をお持ちの金沢良一先生（関西中央高等学校教頭）をお招きしご講演いただきました。以下、金沢先生のお話の概略を紹介しつつ当日の研修会をおさらいしてみたいと思います。

子どもの変化と現在の大学を取り巻く状況

金沢先生は 1984～2004 年に予備校に在職されていました。つまり、子どもの数が多かった時代から少子化時代までを通して 18 歳頃の若者をずっと指導してこられたわけです。その中で先生は子どもたちの変化を目の当たりにされたといいます。たとえば先生が予備校に勤め始めた時期の京大進学クラスでは、勉強時間の配分についてさえ指導すればあとは子ども自身が何をすればいいか理解し主体的に行動してくれたそうです。しかし在職期間の後半に入ると、時間配分だけでなく何をすればいいかまでこと細かく指導する必要が出てきたそうです。京大進学を目指す子どもたちですらこの状況ですから、その他は推してはかるべしです。教師や大人が手取り足取りあれこれと指示をくれることに慣れている昨今の子どもは、全般的に自分で勉強しようという姿勢が弱いとのことでした。

しかしながら、今や大学は全入時代であり、大学の数が増え、進学率も上がっています。現在の大学の多くは、以前であれば学力的に大学に進学できなかった層も受け入れざるを得なくなっているのです。では、時代の変化によって新たに大学が受け入れることとなった学力中間層以下の子どもたちは、高校までにどのような学修経験を経て大学に入学してきているのでしょうか。金沢先生によれば、そうした層の子どもたちはすでに小学校時代から勉強の行き詰まりが始まっており、彼・彼女たちの小・中・高の勉強はつぎはぎ状態だということです。つまり、学校で教えられている内容の一部分はわかっているものの、根本的な部分がわからないまま大学に来ているということです。根本的な部分がわからないなら勉強がおもしろくないのは当然です。本学を含めた多くの大学にとって、こうした層にどのように対応していくかが課題となっているとのご指摘でした。

リメディアル教育による「学び直し」の大切さ

では私たちはこうした層の学生にどう対応すればいいのか。金沢先生は、解決のカギは子どもにとって勉強がおもしろいものになるよう支援してあげることだといいます。そのためには、ある教科や分野の内容がいちから理解できることが大切であるとのことです。さらにそのためには、大学におけるリメディアル教育（補習教育）によって学生に「学び直し」の機会を提供すること

が重要になるとのことでした。金沢先生は実際に関西中央高等学校でリメディアル教育を実践されたそうですが、先生の呼びかけに応じた3名の生徒に小学校5年レベルの勉強から学び直しをさせた結果、最終的には偏差値60台まで学力が伸びたとのことでした。なぜそのようなことがおこるのか。先生によれば、人間の脳は小さい頃は成長に差があり、小学校の頃勉強につまずいた子どもの中には、単に脳の成長が学習内容に追いついていなかっただけのケースもあるとのことでした。だからこそ、脳の成長度合いに差がなくなる10代後半で、過去につまずいたところまで戻って学び直しをする必要があるということです。

勉強のおもしろさを伝えられる力を持った教員が必要

金沢先生によれば、今の子どもは昔に比べ「いい大学に行きたい」「いい暮らしがしたい」といった欲がなく、そのぶん競争意識が低いとのことです。ただし、勉強に対する子どもの意識が低いのは、子どもの競争意識が低いせいではなく、子どもに勉強のおもしろさを伝えられない教員の責任が大きいとのことでした。近年は自分が専門とする教科が心底好きだから教職の道を選んだという教員が少なくなっており、むしろ「教師になること」自体を目標として教職の道に入ってきた教員が増えてきているといいます。後者は、通り一遍の教科教育法には通じているものの、教科の本質やおもしろさを子どもたちに端的に伝える力量に欠けているとのことです。こうした教員は簡単なことを教科書通り時間をかけて教えてしまい、その結果子どもたちは勉強のおもしろさを知らないまま勉強に倦み、意欲を削がれてしまうとのことでした。大学でも話は同じで、学生の学ぶ意欲を高めるためには、やはりその学問分野が心底好きで、そのおもしろさを端的に伝えられる力を持った教員が不可欠であるとのご指摘でした。

学生に小さな成功体験を積ませる

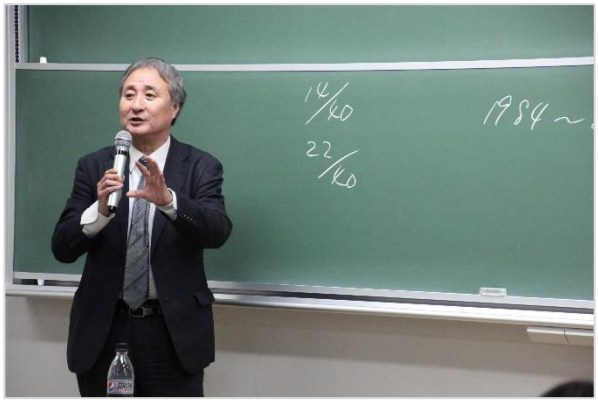
近年、関西地域でも中学校受験が盛んになってきた影響で、小学校から猛烈な受験勉強を経験している子どもが増えてきている一方、中学校受験とは無縁で小学校の勉強すらおぼつかない子どもも増えてきているとのことです。こうした学力の二極化は、特に学力中間層以下の子どもの勉強に対する意識に深刻なマイナスの影響を与えているといいます。学力中間層以下の子どもは高校までに勉強面で成功体験がなく、小・中・高と学修内容のレベルが上がっていくにつれどんどんわからない部分が増えていくそうです。その結果、「勉強はむずかしい」「自分はできない」という意識が強固になっていきます。こうした思い込みは、たびかさなる失敗体験によって培われてきた、何かを達成できなかった時に自分が傷つかないための自己防衛本能ともいえるものだそうです。では、こうした状態のまま大学に入学してきた彼・彼女たちにどうやって勉強に興味を持たせ、やる気を出させるか。金沢先生によれば、その解決策は第一に、先に述べた通り学問のおもしろさを子どもたちに伝えられる力量を教員が持つこと、そして第二に、学生に少しずつ成功体験を重ねさせ、自信を持たせることだといいます。金沢先生は昔から生徒に対して次のような言葉をおっしゃっていたそうです。「『できない』『知らない』は恥ずかしくない。やればいいだけなのだから。ただし、『むずかしい』という言葉は使ってはならない。やってできないことはないのだから」。子どもも教員も、ある時点でその子どもに下した・下された評価は絶対不変のものと思いがちです。しかし、時が経てば評価は当然変わるものだということを認識しておくことが大切だといいます。ある時点の評価を絶対視して「僕・私はこう」「この子はこう」と思い込んでしまうのではなく、子どもは「自分は変われるのだ」と信じて学び、教員は「子どもは変わるものだ」という前提で教えないといけないとのことです。先生のこれまでの豊富なご経験から、「子どもが伸びないのは教員の責任、伸びたのは子どもの力」と考えることができる教員は伸びるとのことでした。

大学時代に基礎学力や基本的な教養を身につけさせる

金沢先生は、本学が今後力を入れていくべき教育の方向性についてもご示唆くださいました。本学の学生が少なからず就職率の高さに惹かれて入学してくるのはアンケート調査などからも明らかであり、それは本学の強みの一つであると思います。しかしその場合、学生にとって大学での学びはそれ自体が目的ではなく、就職までの過程に過ぎなくなります。それではせっかく大学に入

ってくることで得た4年間の学びの意味が薄くなってしまうとのことでした。ではどうすれば学生にとって大学での学びそのものが意味あるものとなるのか。先生いわく、本学のようなケースでは基礎学力や基本的な教養をどう学生に身につけさせるかが重要な検討課題になるとのことです。なぜならば、専門的な部分は基礎ができるようになったあと、やる気さえあれば自分で学ぶことができるからとのことです。つまり、基礎学力や基本的な教養があってはじめて専門的な部分や学問のおもしろさが理解できるということです。大学は専門だけを教える場ではないのだから、もう一度小・中・高の時期に学生が十分身につけることができなかった基礎学力や教養的な部分を補ってあげることが大切で、そのためには全学的かつ体系的なリメディアル教育をおこなうことが重要になってくるとのご指摘でした。しかも、できれば学生を引きつけるためにリメディアル教育を単位化することが理想的とのことでした。

今の学生のよいところは真面目な点です。教えられることに慣れているといえば聞こえはわるいですが、昔の学生と違って毎日大学に出てきますし、授業にもちゃんと出席します。したがって昔と違い、大学や教員が学生に手をかけてあげるチャンスは十分にあるとのことです。長く豊富な教育・指導経験を踏まえた金沢先生のお話は、私たち本学の教職員が学生をより深く理解し、それを踏まえてどのような教育をおこなっていくかについて考えていく上で、多くの示唆を与えてくださるものだったと思います。



研究授業レポート

「人間発達学」

理学療法学科　森岡　周

人間の発達は「運動発達」「認知発達」「社会性発達」の3つに大別されますが、この科目は、2学年前期の「発達系理学療法学Ⅰ」で取り上げた運動発達を除いた認知発達、社会性発達で構成させるとともに、運動発達を含んだ3者の統合を2年次後期に学ぶことを目的としています。一方で、学生自身も未熟であるため、彼ら彼女ら自身の発達、とりわけ社会性の発達を意識して授業を行っています。したがって、理学療法学科の必修科目であるものの、教養の要素を大いに含んだ内容でもあります。

さて、その内容を記述することがこのレポートの目的ではないと思いますので、専門知識や技術としては一見直接に関与しないと思われがちなこの科目に関して、私が学生の学ぶ・聴く力をどのように涵養しているかを以下記述したいと思います。

私の授業でのもっともエネルギーを注いでいるのは、約70名の学生たちの「注意をどのようにコントロールするか」です。注意力は学習に関与する重要要因であることは間違いありませんが、多くの学生の注意を同時にコントロールすることは容易ではありません。もちろん、主体的学習のもと学生たちに何かをまとめさせ、それを発表させることで能動的注意を促すことはできると思

いますが、結局のところは、それを繰り返すことによって、新規性がなくなると注意は低下するのも事実ですし、相手の言葉を正しい姿勢で聴き続けるという秩序・倫理といった社会的行動の涵養にとってはむしろネガティブな影響を示すこともあります（自由を勘違いするなど）。さらには、自由にまとめさせるがあまり、理学療法士養成にとって必修科目としての所定の範囲を完結させたり、質を担保することが難しい局面に陥ることもあります。

これらの要因から、座学で一見受け身姿勢であるように見えながらも、学生たちが活き活きと能動的な意識のもと、話を聴いて学べる場を教師は提供しなければなりません。その際、私がもっとも意識しているのが、アイコンタクト効果です。すなわち、学生たちを常に「見る」という行動です。誰かに自分が見られれば、その相手を見るといった社会的随伴性（見る⇄見られる）を人間は生まれながらにして持っています。そしてその随伴性は単に見つめ合うだけでなく、視線を追従しあう特徴を乳児の時から私たちは持ち得ています。黒板、資料、教科書、スライドといった様々な教材（媒体）を通して授業は展開されますが、ことばを覚えたり、他人の感情を推し量る能力を養うためのもっとも効果的な方法が「ともに見る」という共同注意であることは、これまでの人間発達に関する研究成果から揺るぎのない事実でもあります。

アイコンタクトは視線を誘導させ注意を喚起させるだけでなく、報酬を与えることができます。人間は「認められたい」といった社会的欲求（報酬）をもっていますが、それは子どもの時に起こる「見て欲しい→見られている」という報酬から発展させたものです。見られるということは、学生たちに対して「常に私はあなたに興味をもっています、関心をもっています」という意図のあらわれでもあると同時に、いつしか見ている対象に対してともに愛情が湧いてきます。人が人をあるいは物を好きになるのは、どれだけその対象を見ていたかという量に由来します。「好きこそものの上手なれ」といいますが、そのものを好きにさせる（なる）ためには、どれだけ見させる（見る）かが大きなポイントになります。意欲は最初からあるわけでなく、どれだけ行動を起こしたか、あるいは見たか感じたかに大きく依存するわけです。

さらには、アイコンタクトは倫理観も養います。他人が見ている時間・空間では問題行動も減りますし、「あくび」すらも減ることがわかっています。そして、人間は無意識に他人の行動に同調するため、一人でもネガティブな行動や態度を許してしまえば、それが周辺にしぐさ・表情として伝染していきます。「あくび」も伝染するように、ちょっとした教師側の意識の緩みによって教室がネガティブな空間になるわけです。したがって、教える側自身もやはりしぐさ・表情が大事になるわけです。教師側が学生を見なければ、いつしか学生は教師を見なくなりますし、教師がしかめっ面であれば学生たちもネガティブな情動になります。なぜなら、人間は同調行動を介して社会を形成してきたわけですから。「類は友を呼ぶ」ということばの重さを時に私自身も痛感するわけです。

最後に、私は今でもバンド活動や地元の祭りを運営することがしばしばあります。こうした経験が知恵（ライブ感を意識した授業運営）として発展してきたのではないかと今となっては振り返ることができます。加えて、様々なメディア（テレビや映画）などの展開（飽きさせない工夫、テンポ、リズム、間、そしてトーク力）はとても授業を運営する上で参考になります。注意機能が未発達な幼児であっても「サザエさん」や「ちびまる子ちゃん」ならなぜ見続けられるのか、そうした事実もとても参考になるわけです。最後になりましたが、研究授業に参加いたたいた方々に心よりお礼申しあげます。

「老年看護学援助論Ⅱ」

看護医療学科　南部　登志江

授業科目は、3 年次前期に開講される「老年看護学援助論Ⅱ」（1 単位・30 時間）の講義・演習科目で、今回は「高齢者疑似体験 into aging」という演習形態でした。学習目標は、1. 高齢者疑似体験をし、老性変化に伴う身体的・心理精神的・社会的変化について理解する。2. 課題学習やグループワークにおいて、体験した学習内容を共有することができる、です。加齢に伴う高齢者の身体的・精神的変化を疑似体験することを目的に、学生は事前学修として、高齢者に対するイメージや呼ばれたい名前、生きたい年齢について事前学習シートに記入して演習に臨みました。これは、老年看護学援助論Ⅱでは、最初に紙上事例による看護過程を展開しており、その後最初の演習だったので、意識付けの意味で行っています。演習では、学生が「おいたろう」という高齢者疑似体験スーツを着用し、1 人 15 分間で A コース（身体機能の低下体験）と B コース（巧緻性の低下体験）のいずれかを体験します。これは時間的に両方の体験は難しいので、両方のコースで身体面および巧緻性について体験できるようにしています。また、安全面に考慮して、高齢者・援助者・観察者の 3 役を決めて順番に 3 役を体験するようにしています。まず、教員がモデルとなり高齢者疑似体験スーツの着用方法を説明してから開始します。装具を取り外すと「こんなに聞こえやすい」「楽になった」と高齢者の加齢に伴う変化を実感していました。

（教員によるデモンストレーション）

（Aコース　老視の体験新聞を読む）

（Aコース　巧緻性の低下の体験Kio スーパーで買い物をし、お金を払う）

（Bコース　ポータブルトイレの立ちしゃがみ）

6 月 17 日（金）に授業研究があり、その中で、まとめの時間が少ないのでA コースとＢコースの学びおよび全体での学びを学生が共有しにくいのではないか、という意見がありました。また、演習場所が今回は看護実習室のみでしたが、以前は大学内の庭や校舎などで行っていたこともあり、畳を使うなどの方法もよいのではないかという意見がありました。安全や雨天の場合のことを考えて実習室でしていますが、体験の項目も含めた場所の検討が必要だと考えます。また、全部の時間を使って演

習するのではなく、途中でまとめの時間をとって考えていくという方法もある、など多くの意見をいただきました。次年度の演習でこれらの意見を参考にさせていただきたいと思います。

「給食経営管理論実習Ⅰ」

健康栄養学科　上地　加容子

給食経営管理論実習Ⅰは、管理栄養士・栄養士資格必修科目で、1 回生で調理実習を１年間学んだ後、2 回生後期に開講されています。給食経営管理論をはじめとする専門科目で学習した理論、他教科で得た基礎知識や技術を活用して、給食サービスを実践することによって、給食経営の考え方や給食運営に関する技術などの能力を身につけることが到達目的です。

給食経営管理論実習は、調理実習などのように班で同じ内容の作業を進めていくのではなく、例えば、各班が試作、下処理、調理、衛生・サービスといった役割分担をし、給食を提供します。当然各班で作業が異なりますが、これらを同時進行しています。本学では、役割により使用する教室が４つに分かれること、衛生面の観点から隔壁で遮られた構造であることが、授業運営を難しくしていると感じています。

別名大量調理とも呼ばれる給食提供は、大型の調理機器等を使用することから、授業で最も優先されるのは安全面の確保です。ガスコンロやフライヤーなどは業務用で立ち消え安全装置がなく、オリエンテーションで着火したことを確認するように注意を呼びかけていますが、一般家庭では立ち消え安全装置付きのガスコンロが普及しており、毎年着火の確認を怠る学生が続出します。そのため３年前からはオリエンテーションで「ガスをつける時には教員を呼ぶように」と説明しています。

管理栄養士は調理師や事務職などの他職種と連携をとり、組織として円滑に仕事を進めることが求められることから、管理栄養士が働く現場に近いスタイルで、実習を行っています。スタッフに円滑に動いてもらうことは、管理能力が問われることであり、同時に安全面や食品衛生管理も適切であることが求められます。授業の後半に反省会を実施し、各人が作業内容の発表を行い、各班の実習内容を詳細に共通理解することで、当日の実習の全体像を把握し、業務の理解を深め、安全で安心できる給食提供のためには、何が必要であるかを効率よく学習してもらうように心がけています。また、毎回実習終了後にレポート提出を求め、各人の実習評価、改善点の検討を行っています。今回のレポートからは、調理技術の向上や事前の予習の必要性、実習中の全体の進行状況の把握、実習中に新たな判断が求められる等の記述が多く見受けられました。

できる限り PDCA に沿った授業運営をすすめ、給食の運営と管理という管理栄養士としての主たる業務についての理解が深まるように、今後も尽力していきたいと考えております。

「住環境計画Ⅰ」

人間環境デザイン学科　清水　裕子

住環境計画Ⅰは、一回生後期に配当された、一級建築士・二級建築士の受験資格必修科目です。本授業では、住環境の基本的な構成要素となる「住宅」について、各居室別に求められる要件とデザインの基本を学び、多くの具体的な事例に触れることで、総合的な設計力の習得を到達目標としています。

授業は毎回パワーポイントを活用し、穴埋め式のワークシートを配布することで、重要な箇所は学生が書き込むようにしています。

授業構成は大きく5つに分けられ、①前回の復習　②本題１　③関西圏内で開催されている建築関連のイベントの紹介　④本題２　⑤本題に関連する建築の紹介　の順に進めています。１回生のこの時期に、学外で開催されている建築関連イベントや建築の紹介をコンスタントに行うことで、建築の基礎知識の習得のみならず、実践的な学びの機会が学外にも多様に設けられることを意識させ、建築に対する興味関心の促進を期待しています。今後は、「①前回の復習」の中に、小テストなどを実施し、授業後の事後学習の機会を増やすことを検討しているところです。

研究授業は、第５回「 住空間の構成原理–住宅平面の考え方・敷地条件による住宅形態の変化–」でした。平面のプランニングについて、どのような視点を持ちながら計画していくのかを、敷地条件の形態の変化別に取り上げました。基礎知識について、一般的な事例を元に示したのち、関連した著名な建築家の作品について、国内外の事例を紹介しました。デザイン性の高い建築作品の紹介は、毎回楽しみにしている学生も多く、この興味をいかに知識として習得させられるかが、今後の課題であると考えています。

今回の研究授業では、私自身の緊張から、普段より重々しい雰囲気になっていましたが、今後も、多くの建築に触れる機会を設けることで、建築に関わる仕事の魅力を伝えられる授業を心がけたいと思います。
最後になりましたが、研究授業にご参加いただきました 先生方、皆様に心よりお礼を申し上げます。

「生涯学習論」

「『知る』ことは『感じる』ことの半分も重要ではない」
レイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』

現代教育学科　前平　泰志

ある学生がある授業中につぶやいた言葉です。――「答えを早く、わかりやすく、面白く教えてほしい。」もし、学生たちがそのように考えているとすれば、少なくともこの「生涯学習論」では残念ながら望むべくもないのだ、ということを（知ることでなく）、感じてもらうことから始めています。

「生涯学習論」は、３回生に配当されている専門基礎科目です。変化のスピードが著しい現代社会では、学生時代に学んだ知が社会に出るころにはもうすでに旧くなってしまうことも珍しくありません。そのことを意識して、授業の展開は何を学んだかという知のストックよりも、どのように学ぶかという方法やスタイルを学んでもらうことに重心をおいています。このような方法をとるのは、学生たちが将来どのような職業に就くにせよ、社会に出てからどのように時代が変わっても生涯にわたって学び続けられるような姿勢を身につけてもらいたいと願っているからです。とはいえ、そのような想いはあっても、その想いが学生に常に通じるというわけではなく、上手くいくときもあればいかないときもあって、試行錯誤を重ねている段階であることを告白しておきたいと思います。もちろん、学ぶ内容は学ぶ方法と切り離せないものですので、方法論のない知識内容だけを教えることが空疎なのと同様、内容のない方法論のみを教えることは無意味です。

では、どうすればよいかということですが、私は、これ以上分割されない知としての学生一人ひとりが持っ

ている<身体>に着目し、まずは、その自己の身体の感覚を基準にして、自分の過去の経験や現在の生活等を見直してみる、そしてそこから一歩進めてそれはなぜなのだろうという問いを自らに発してもらうという作業から出発することにしています。（そのことはあくまで出発点であって、「なんでも自己の感覚で測りなさい」という意味ではありません。）

今年度は、昨年度に引き続いて「感覚のマップづくり」に取り組みました。これは山下柚実さんの『五感生活術』（文春新書）を参考にして、自らの五感（視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚）を意識的に使うことによって、お仕着せられてきたイメージを払拭し、「自分自身の感じ方を発見し、暮らしに活かしていく」方法を探ることにあります。現代社会は、五感のうちでもとりわけ視覚が圧倒的に重視され、「目の専制」や「視覚帝国主義」という言葉があるほど目に依存しています。学校教育もその範疇から逃れられません。というより、学校教育こそが、視覚に依存する体制をより強固にしてきたと言っても、過言ではないでしょう。

授業での今年度の「感覚のマップづくり」は、そのような問題意識を投げかけながら、小グループに分かれて、大学の外に出て、近隣のショッピングモールのなかを探索することから始めました。視覚を焦点から少しはずしただけで、これまで当たり前のような日常の風景が新鮮な風景として立ち現れてきます。同じショッピングモールの売り場であっても、売り場ごとに匂いは異なっていますし、目で見ることと触ることの違いを学生自身があらためて発見するのは楽しいことです。そのような経験を経たうえで、キャンパスに帰ってきてマップづくりに取り掛かります。このマップづくりはお仕着せでない分だけ楽しいものですが、学生たちは結構難航します。

学生自身が自分のボキャブラリーの乏しさに気づくのはこのマップづくりを通してです。匂いの微妙な差異、電気器具を触った時の感覚はどのように表せばよいのか、その感覚を味わったことのない人に、どのような言葉で伝えることができるのか、他者に言葉でわかってもらうための普遍性を獲得することはそれほど簡単なことではないのだということをいやというほど気づかされるからです。

学生たちのもうひとつの大きな気づきがあります。視覚をひとたびは括弧に入れるといっても、他者に説明するときには、視覚を完全に抹消することができないという矛盾です。マップづくりは一人ではなく集団での作業ですので、そこでは作る段階はもちろんのこと、終わった後もまさにワークショップ(工房)が続けられます。授業の方法として、「教科書を使わない」、「パワーポイントやビデオを見せない」というのは「目の専制」に反対する立場から言っても当然といえば当然の方法ですし、ワークショップはそれに代わるものに値するのですが、にもかかわらず、マップそのものが、そもそも視覚を基にしているではないかという気づきです。そこから今度は、完全に分離できると思った一つひとつの感覚もまた、視覚はもちろんのこと他の感覚を前提にして協働しているのだという段階に思い至ることになります。あらかじめ決められた正解のなかに学生たちの問題意識を囲い込まないという原則を忍耐強く堅持しながら、何が起こるかわからないというハプニングの学びの面白さを共有できたときの喜びは、教師冥利に尽きるといっても言い過ぎではないように思うのです。

2016 年度 FD 活動報告

前　期

4 月 1 日	『NEWS FD+』の発行
4 月 8 日	新任教職員研修会
6 月 9 日	看護医療学科　研究授業（6 月 17 日　授業研究）
7 月	前期授業アンケート（第 14 回授業日）
8 月中旬	後期授業アンケート集計結果のフィードバック・授業改善アンケートへの回答ご依頼

後　期

10 月 26 日	人間環境デザイン学科　研究授業（10 月 29 日　授業研究）
	健康栄養学科　研究授業（11 月 16 日　授業研究）
11 月 1 日	理学療法学科　研究授業（11 月 9 日　授業研究）
11 月 22 日	現代教育学科　研究授業・授業研究
12 月	後期授業アンケート（第 14 回授業日）
2 月 23 日	平成 28 年度 FD 研修会
3 月初旬	後期授業アンケート集計結果のフィードバック・授業改善アンケートへの回答ご依頼

＊2017 年度研修会等の日程は決まり次第お知らせいたします。今年度も本学の FD 活動に対しご理解ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。